

藤原定家の研究

その人間像と芸術創作との関連

市 橋 恵 子

は し が き

藤原定家は、言うまでもなく新古今集の代表的作者の一人である。定家の「日記明月記」から読み取られるその性向は異常性が強くその歌風とは興味ある対照をみせている事からこの研究を思い立つたわけである。本論の目的は、この様な定家の芸術創作面と現実生活面との矛盾の鍵をさぐる為に、その日記にみられる定家の生きた全面的人間の把握に努めつつ此処からその和歌製作の動機とも言うべきものを今一度検討する事にある。

定家の日記を取上げる前に、先ずその歌風について簡単に整理を行つて置きたいと思う。さて、定家の歌風と言つても、それは一人孤立したものではなく、父俊成の和歌に従い、当時の貴族の

文芸意識に大きく規定されたものに外ならない。中世に於ける空前の時代的変動は、没落貴族の生活意識を緊張させ、みずからの文化に対しても強い意識を持たせた様である。貴族達は無常感に彩られた複雑繊細な感情をもつて、はかない人生や自然を嘆じ恒久なるものを憧憬して過ぎし王朝盛時を懷古思慕した。この様な感傷的詠嘆がおのずから貴族達の作歌契機となつたのも無理からぬ事である。貴族達は自らの伝統文化に対する信順帰依の感情をこめて、和歌の新なる境地を開拓した。現実に対して目を瞑り、ひたすら魂の故郷を思慕する如きその精神こそ、実に新古今集の美しい生命である。こうした高潮した唯美的感傷的情緒に、美しく優れた具象的描写を与えたのが俊成であり、俊成の新しい芸術には多くの渴仰者が生じた。定家も又その中の一人であつたわけである。鋭敏な感受性と理智的な才能に恵まれていた定家であつたから、こうした勢づいた文芸運動が直接に彼の創作欲を刺戟した

事は容易に考えられる。

定家は「和歌はやさしく物あわれによむ」（毎月抄）事をその本体としている。毎月抄に

げぎにいとおそろしき物なれども、歌によみつれば優にききな
さるるたぐいぞ侍る。それにもとよりやさしき花よ月よなどの
よしの物を、おそろしげによめらむは何の詮か侍らん

と述べている。「恐ろしきもの」を恐ろしく表現してこそ真に徹する理であるが、それは歌ではありえない。優美に、そして何となくあわれによむ事こそ歌の理想とすべきであると言う。この様な主観的な対象把握は、定家の説く「心ある歌」所謂有心体の最も中心的な考え方であつて、俊成が「凡歌は優艶ならんこそ可レ令三床幾二を」（六百番歌合判詞）と説いた立場を踏襲したものと
思われる。更に俊成は和歌を「天台止観の哲理にも通うものである」と之を深刻視して沈潜の気分を尊んだのにしたが、定家も毎月抄に、歌を詠む時は「心をすまして、この一境に入ふさ」ねばならないと説いている。「心をすます」とは、俗念を払い、現実の世界を忘れて清澄な心を保つ事であり「この一境に入ふす」とは詩境に魂を遊ばせ、芸術の三昧境に身を委ねる事である。事の真否は判らないが正徹物語に、

定家の申されたるは、歌を案ぜん時はつねに白氏文集の故郷

有母秋風涙旅館無人暮雨魂の詩を吟ぜば、こころたけたくなりてよき歌のよまるる也……

と言う話が伝えられているのも「一境に入ふす」と言う詠歌態度の消息を具体的に言い表わしたものと思われる。この様に定家の歌は、現実界から隔離された詩境に於いてある感傷的な詩句を味い、その情にひたりつつ始めて詠出せらるるものであつた。現実を詩化するものこそ本来の和歌であると定家は信じこの麗しい詩境に深く心を引かれたのである。故に定家の詠歌態度は、実感や詠嘆をそのまま詠出するものではなく、その教養や趣向から触発されたところの観念的聯想や、想像の映像を詠出せんとする意識した構えなのである。定家の数多くの歌はすべてこのような想像の所産である。

具体的な歌の例を挙げてまずその内容について考察しよう。新古今集にも載せられている有名な歌

大空は梅の匂ひに霞みつつ

曇りもはてぬ春の夜の月（仁和寺宮五十首）

の歌は、同じく新古今集収録の大江千里の歌

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

を本歌にとつた同心歌である。本歌が春の夜を説明し讚美しているのに対し定家の方は、その情景を描写する事によつて、春の夜

の妖艶な気分を「そうとする」。「朧月夜の曇りもはてぬ」理由として「梅の匂ひに大空が霞」んだとしたのは、定家の主観的な自然把握の一例である。大空全体が梅の匂いで霞むと言う事は、普通の常識では到底考えられない様な誇張的表現であるが、是は彼の把える素材がありのままの自然でなく既に主観によつて精神化され、妖艶の情緒を慕う心によつて色付けられている事を示している。

白雲の春は重ねて立田山

をぐらの峯に花にほふらし

(院初度百首)

と言う歌は遠山桜の艶をゆかしむ心を詠じたものであるが、遠望する春の白雲のかゞやきを桜の咲き匂う証拠と見立て、「花匂ふらし」と推量したのは、あまり微細に過ぎて之も又誇大表現である。又一例をあげてみると次の如きがある。

夕暮はいづれの雲のなごりとして

はなたちばなに風の吹くらむ

(仁和寺宮五十首)

この歌は、庭の花橘の香を伝えて来た風に強い懐旧の情を誘われたと言うのである。而もその「風」には一つの解釈が附されている。つまりその「風」は今や亡き人の誰の化した雲ともわからぬ雲を吹いて来た「風」となして、此処に作者が極度に又執拗にその因縁を追求しているのが見られる。彼が懐旧の詩情を深化させ

る為に「風」一つに対してもこの様に濃厚な主観的想像を含ませている事は驚くべき事であり又、その歌を一段と難解なものにしている。「やさしく物あわれ」の気分を深め強める為に、このような粘り強い空想をめぐらし表現しようとするところに定家の特徴がある。

梅の花匂ひをうつす袖の上に

軒もる月の影ぞあらそふ

(院初度百首)

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苫屋の秋の夕暮

(二見浦百首)

等にも気分強調の粘り強い詠歌態度がうかがわれる。もし、印象を再現する写實的描写が「自己の内面感情が外的自然によつて支配される状態である。」とすれば、定家の歌は是とは逆に「内的感情を以つて外的自然を支配しようとする強い欲求の状態」と言い得よう。故に定家の歌に於ける目的は対象の描写や形象化自体にあるのではなく、一定の気分情緒の描写表現にあるのだから、対象を必要とせず気分を必要とする性質のものである。是を更に鑑賞者の印象から言えば、明瞭な形象的印象ではなくて朦朧とした抒情的印象となるのである。是は恋歌に就いても同様である。否、むしろ恋歌に於ける定家の想像には、四季歌のそれに比較してなお一層自由奔放な動きが見られる。当時の恋歌は恋の悶え喜び等の

真情をそのまま吐露することはせず待恋、忍恋、片恋、不逢恋、
遇不逢恋、後期恋等と題して、内気でおとなしやかで含みを持った
心が纏綿とした想をめぐらすという類である。定家は新奇な着想
や綿密周到な構想を駆使して是等の情緒を髣髴させる優れた手腕
を有していた。ある時は不如意の恋に嘆き悲しむ女に身をなして
恋の願いを囁いたり、あるいは夢物語を描き自己を反省する等の
物語的構想を種々試みた。代表的なこの種の歌を拾ってみると、
帰るさのものや人の眺むらむ

待つ夜ながらの有明の月

(閑居百首)

年も経ぬ祈る契りは初瀬山

尾上の鐘のよその夕暮

(歌合百首)

等がある。更に進んでこの恋の情緒を象徴的構想によつて詠出し
たものに、

松山と契りし人はつれなくて

袖こす浪に残る月かけ

(新古今集恋部)

尋ね見るつらき心の奥の海よ

潮干の潟のいふかひもなし

(院再度百首)

等があり是等は皆、定家が観念聯想の力を利用して美的官能の世
界を、和歌形式の中に盛り込んだ巧みな構想歌である。定家の歌
が「情」から詠出されたものではなく「頭腦」によつて造られた

歌であると言われるのもこうした処に存するのである。

二

次に歌の内容から進んで定家の和歌がどのような具象性を備え
ているかについて見て行きたい。一般に言つて、ある特殊な抽象
的気分内容を表出する場合には、一定対象を見たまゝ写生する時
よりも極めて高度な形象化の技術が要求される。この事は当然の
事であるが、定家にとつても表現はすなはち技巧であつて、その
表現においては一字たりとも疎かに出来ぬ敏感にして慎重な言語
選択が行われる。なるべく抽象的概念的な言葉は避けて、出来る
だけ豊かな感覚的直観的な言語が表現に盛られるわけである。

花の香の霞める月にあくがれて

夢もさだかに見えぬころかな

(院初度百首)

霜迷ふ空にしをれし雁がねの

帰るつばさに春雨ぞふる

(仁和寺宮 五十首)

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に

霜おきまよふ床の月影

(千五百番歌合)

駒とめて袖うちらはらふかげもなし

佐野のわたりの雪の夕ぐれ

(院初度百首)

等の「花の香に霞める」「霜おきまよふ」等の言葉は何と鮮明な

感覺的描写であらう。之等の歌は鑑賞者の眼前に幽麗なる情景を
髣髴せしめる定家の秀抜の手腕を示している。之と同様な視覚的
表現は次の様な恋歌にもみられる。

須磨の海人の袖に吹きこす湖風の

なるとはすれど手にもたまらず (皇后宮大夫百首)

定家はこの様な表出法を一層効果的にするために、微細な点に注
意を払つて多種多様の修辨的技巧を試みた。定家の用いた技巧の
主なものは縁語、懸詞、本歌取りを始め、名詞止め、一句切れ、
三句切れ、倒置法、省略等である。谷鼎氏の研究によれば、定家
の本歌取り及び縁語、懸詞の使用回数やその手法の変化における
工夫等は、当時の歌人達俊成や家隆や或る内親王等に比して遙か
に傑出していた事がしられる。しかし定家のこの技巧は、ある面
ではその和歌の一大欠点ともなつたもので、もし試みられた技巧
が構想と調和しない場合には、いたづらに技巧のみが先走つた様
な非直截概念的歌に墮入つて了うのである。がしかし、この逆に
その技巧の故に定家の芸術的意圖が巧みに生かされうる場合は実
に豊潤で繊細な幻想美が現出する事ともなるのである。

消えわびぬうつろふ人の秋の色に

身をこがらしの森の下露

(院再度百首)

この歌等はその表現が実に巧緻でねばり強いものである。「わ

ぶ」を「下露」と関係させ「うつろふ」は「心変る」と「紅葉す
る」の二意を含み「秋」には「飽き」を懸けてある。「色」も相
手の「容子」と「秋の景色」とを指し、「こがらし」は「身を焦
す」と「木枯し」との二義を有している。句々すべて懸詞にし複
雑妙を極めた処に、飽かれた際の思いに焦がれて死なんばかりの
女心が執拗に表現されているではないか。次に技巧の中で注目す
べきものに象徴的手法がある。是は定家が鑑賞者の聯想を考慮に
置いて綿密細心に計画したものであつて、例えば

松山と契りし人はつれなくて

神越す波に残る月かげ (新古今集恋部)

桜の花にほひをうつす袖の上に

軒もる月の影ぞあらそふ (院初度百首)

の「波」や「袖に月がうつる」と言う言葉の下に「涙」の意を含
ませると言う手法である。之は鑑賞者に対して一時に二様の美を
感じさせ、暗示的表現によつて気分の複雑味を感じしめる様に苦
心されているのである。この様な様々の技巧の極度の鍊達は、感
覚語の諧調的なリズムによつて病的なまでに繊細な官能的美を醸
し出す事になる。例えば、

白妙の袖の別れに露落ちて

身にしむ色の秋風ぞ吹く

(水無瀬殿恋十五首)

いかさまにせきかとゞめむ色かわる

人の木の葉の末の白瀟

(韻歌百廿首中)

春の夜の夢の浮橋とだえして

峯にわかるゝ横ぐもの空

(仁和寺宮五十首)

等である。是らの歌は定家の意圖した気分描写の最高の作品であろう。その取扱われている素材や形象は既に失われて、存するものは只私共に美的快感を与える音楽的印象のみである。山崎敏夫氏の言われる「三十一音と言語的意味とが相交つてかもし出す情調世界」が新古今歌風の特徴ならば、是等の和歌はその情緒表現に於いて、一際純粋度を増した名工的一級品の名を与えても決して過言ではないであらう。

三

しかるに翻つて定家の日記明月記を読むと、一見別人の観さえる。その和歌と日記との一致した部分はまことに僅少であるからである。その日記の中には、恥も外聞もなく嘘偽りのない定家のその時その時の心情が残らず吐露されてあつて、氣の毒な程に自身の全貌をさらけ出しているのである。明月記を手にとつて見て、私共が先ず辟易させられるのはその分量であるが、十九才の春に筆を起して薨ずる六年前の七十四才の暮十二月三十日迄、実

に五十五年の長い間書き続けられた日記(現在闕けた部分もある)を見ると、並々ならぬ定家の根氣強さに感心させられるとともにこの事は、定家の人間を理解するのに極めて重要なキイポイントである様に思われる。こゝで定家の才能や性格に触れてみたいと思う。

明月記を読んで先ず感じる事は、定家は博識多才の人であると言ふ事である。その文章の豊富な語彙や広汎な出典には他の追従を許さぬものがある。又、定家は必要にせまられては優れた議論家でもあつた様で、日記の中に「予言」とか「答言」等とその見識を披露しているし、宮廷の儀式作法、法式慣習諸般に互つて詳しかつた様子である。

弓道や馬術の達者でもあつたが、政治的手腕は恵まれていなかった。けれども一体に、定家は俊敏なる頭腦の有主であつて、この事は何よりもその和歌や歌論が証明しているのである。萩原朔太郎氏はその歌を評して「数学者の緻密なる係数法則式を聯想させる」と記しておられる。近代秀歌、毎月抄、詠歌大概等の歌論は、俊成によつて開拓された新しい芸術的和歌に批判的考察を加え、之を集大成して組織的に纏め上げたものであるが、その十体論や花実論、作歌法等を記す「毎月抄」は当時としては珍らしく要領を得た統一あるものである。好書家の定家をして考証校勘

の偉業を遂げさせたのも、かゝる知的頭脳と、几帳面なその性格のしからしむる処であつたのであらう。単なる供養の爲の写経の場合でも脱簡錯誤を校合しなければ気がすまなかつたと言う事である。

定家は、その詩人的素質を父俊成から受継いだのであらうか、鋭い感受性にも恵まれていた。若い頃の日記には、その瑞々しい感受性が、かなり巧みな文章によつて描出されて居る。

入夜明月蒼然、故郷寂而不聞車馬之声、步縱容而遊六条院辺、夜漸欲半天中有光物、其勢鞠之程歟、其色如燃、忽然如躍似自坤赴民、須臾破裂、如打炉、火散空中了、若是大流星歟、驚奇……（記、治承四年九月十五日条、以下「記」とあるは「明月記」を指す）

大流星を追う定家の驚奇の眼は、世のあらゆる刺激に敏感に反応順応し、その印象を摂取しようと息づいている青春のな力に漲つてゐる。彼が十九の年源氏の拳兵、清盛の死、平家滅亡と世は目まぐるしく回転した。兵革の機運は動き、都は物情騒然となり遷都の噂は女房達を悲しませた。月寂としてひっそりした夜が続いた。遷都後、程経ずして廢墟には蔓草が満ち、立藪は多く顛倒する有様であつた。この中にあつて感じやすい定家の心は無常と孤独とに満されたのであらう。定家にとつて紅旗征伐は関心事で

はない。（記、治承四年九月条）衰微してゆく貴族達の悲哀と苦悩とは定家の身を高踏的な立場に立たしめ、現世の無常は彼の魂を恒久なるものへと向わしめた。定家は過ぎにし王朝榮華の跡に佇立する時、最も純粹素直な心持になつて懷旧の情に咽ぶ事もあつた。（記、安貞元年九月廿四日条）

この様な懷旧の情は、古人に対して強い親しみを増し、定家の晩年は殊に古書愛翫の生活が続いた。

予本性慕古人之心、極深、近日殊日夜握翫彼記（長和之頃）依此執心、見此夢歟歟（記、安貞元年九月廿七日条）

又彼は自然を友とした。日記のあちこちに、片言隻句ではあるが、よく季節の推移を感じ取つて綴つてゐる。

晚雲飛時雨灑、草蘭索之色、滿望動心（記、安貞元年九月六日条）

今朝、槿花初開女郎花已盛萩一兩枝僅開（記、文暦元年七月十四日条）

このように不安な現実よりも古に深い関心を寄せ、古人の心を尋ねて慰めとも悦びともし、自然を愛した定家は、さすが中世人としての風貌を偲ばせるものがある。がしかし定家はこの一面だけでなく、非常に多角的な人であつたから他の多くの性質を有し、日記にはとりわけ次の様な記事が多くつづられてゐる。

人との交際と言うものは、なか／＼困難なものであるが、定家もその性質の故に種々の悶着を引起した様である。「大日本史歌人列伝」によると、「定家性頗狂躁、急於進取、素負才氣、常嘆不遇怨之言、屢見於歌詠」とある。「玉葉」文治元年十一月廿五日条に依ると、定家廿五才の時殿上で人と鬭争し、燭台で相手を殴つたので除籍されようとした事が見える。廿五才といえは血氣に逸る頃とは言え此の様な生一本の性格は随分他人の誤解を招いたようである。

正治二年定家三十九才の頃の記に「予辞歌作者假名状、如季経等悉せ歌詠判之時、難堪之由書之」（記正治二年四月六日条）とある。定家が季経なる人物に向つて「悉せ歌詠」と罵倒しているのであるが、この事件の背景を少しばかり紹介して定家の人となりを探つてみよう。

此の記事以前に彼は太后宫から、定家の主人良経を通じて歌合の歌を求められた。その折定家は、良経邸の歌合ならば止む得ないが他の場合はお許し願いたい。詰らぬ作者と結番せられたり、尊敬も出来ぬ判者の判を受けたりする事は自分としては耐えられ

ぬからと、假名状を送つた。而して到頭病氣と称して歌を出さなかつたのである。この手紙が、最後に判者となる季経の処へ廻つたので、季経が大いに立腹して良経へ訴訟した。大略以上の様な事情であるが、両者の悶着には云うまでもなく、九条良経と云う同じ主君に仕えた、六条家と御子左家という互いに重代の歌よみの家柄としての対立及び競走意識がみられる。而して定家のこの不遜な態度が良経の氣持を損じたらしく、或人等は、定家は病氣引籠り中だと、取なしたりした。彼は意外な結果を生んだので大いに憤慨し、次の様に記した。

「不借身命雖存忠節……親雅季経讒言被信用被处理賢人也公卿也可信可貴甚無益之世也」（記正治二年四月九日条）定家がこの様に立腹したのは、次の様な事情があつたからである。季経等六条家の一族は、九条家に出入りして親しく仕えていたが、文治の頃九条家が政治的に失脚すると出入りしなくなつた。而して六条家は、九条家の政敵源通親等に接近して九条家をかえりみなかつた。これに反し御子左家は節を守り主家と愛いを共にして来た。

ところがその後九条家が回復すると、六条家の人々は又出入を始め、臆面もなく歌合の判者さえ勤める様になつたので、忠節を尽した御子左家が無節操の季経輩の讒言に遇う事の忿懣を述べたのである。定家は更に「飛鳥つきて良弓蔵せられ、狡兎死して走狗

煮らる、共に夢えて共に樂しまずとはこの事なり」(記、正治二年四月九日条)とつづけている。真面目に主君に仕え而も生一本のところがあつて、社会的にも幸福でなかつたらしい定家の面影を偲ぶ事が出来るのである。この事件は後々まで彼によからぬ結果を齎した。その後三カ月経つて、後鳥羽院初度百首の作者選びが行われた時の事である。定家の名は、一時その中に加わえられて居つたが、先の仮名状に怨恨を有つた季経が通親をして加わらせない様にさせたのである。定家は是を知るや、早速日記に記して「此百首事凡非勸慮之撰云々、只権門物狂也、可彈指」(記正治二年七月廿六日条)と怒つた。而して、義兄公経に書を送り知人の間を歴訪して作者に入るべく奔走し、最後に父俊成が仮名状を院に奉つて漸く作者の列に加えられた。定家は非常に喜び、北野に祈願を籠め、門外不出で歌を推敲し俊成に批判を受けて訂正し、八月廿五日献進した。彼三十九才の時である。歌は勸慮に叶つて即日内昇殿を許され、是より彼の運命は開ける事となつた。定家は個情の強い、非常に才を氣負つた面があるかと思えば、又その反面、生一本で無邪氣な喜怒哀樂の感情を剝出す正直者でもあつた。彼のこの様な性格から生じ人目に立つ高慢の態度は、後鳥羽院に対してもなお憚る処がなかつた。建仁二年新古今和歌集撰進の命が下ると彼も撰者の一人に選ばれた。是より院始

め撰者達の非常な努力により、元久元年七月廿二日に撰歌部類始が和歌所に於いて行われ、同二年三月、一先づ成つて廿六日に竟宴が行われる運びとなつた。この時、定家は院から再三出席する様に通達を受けながら「延喜古今、天曆後撰、管見之所不見竟宴事」(記元久二年三月廿日条)と言ひ又「抑此事何故被行事手非先例」(記元久二年三月廿七日条)と云つて召に応じなかつた。

その後も新古今編纂事業は院の御意により、幾度も重ねて切継が行われた。定家はの場合にも「依仰又切新古今、(出入加反掌)以切継為事、於身無一分面目」と承元元年十一月八日の日記に記して忿懣を表している。院と定家の和歌に対する趣好が一致せず、彼は新古今集に就いて不平の多々存した事(小島吉雄氏「新古今和歌集の研究(続篇)」二九五頁参照)定家の和歌に対する自信を切継毎に傷つけられた事等がその原因とみられる。院の召に対して「前例にあらず」と主張し強固に反対の意を示した彼には、職業的歌人としての見識と自負と理屈ばさが窺われて甚だ興味ふかい。或時は、定家は同じ選者仲間から「諦御点歌」とか「歌善惡一身辨存之由有誇張之氣」(記元久元年八月廿三日条)等と讒謔される事もあり、さすが後鳥羽院も彼を制馭しかねられたとみえて

道に達したるさまなど殊勝なりき。歌見しりたる景色ゆゝしげ

なりたりし引汲のこゝろになりぬれば鹿を馬とせしがごとし。

傍若無人ことわりも過ぎたりき（後鳥羽院御口伝）

と記しておられる。此の様に直情径行、すべて対人關係に円満を欠く定家であつたから、彼の日記にも造敵、讒言の記事が屢々見られる（記建曆二年二月十五日条）定家はこれら自分に関する世評に対し多分に神経質なところをみせているし、又自判の歌合に於ける自歌に対しては、常に神経を用いて「負」にしているところ等を見ると、根は案外氣弱であつたかもしれない。又、世間体を憚る自意識の強い人物であつたと思われる。一体に定家は生涯多病であり、虚弱であつた。「十四歳の時に赤班を病み、十六歳の年に疱瘡に罹つてから、以後病氣と云う病氣はみんな経験した程身体を弱くしてしまつた。健康にはよく／＼注意をせねばならない」（記、安貞元年十一月十一日条）と晩年の彼は記している。殊に建仁前後、彼が四十歳の頃からの健康状態が著しく悪かつたようである。その時は、湯治に出かけたり、嵯峨の山莊に引き籠つて灸治薬湯を試みたけれども、新古今集編纂の事や歌合や公事に追われて調子はよくならなかつた。癒つたかと思うと又再発した。「心神不快」「心神無為方」「心神殊悩」の文字は日記の至る所に見受けられて痛々しい。多病は彼の性格に禍して、彼を主角の人たらしめたようである。

「大日本史歌人列伝」によれば前述の「性狂躁」の文章に続いて、次の様に記されている。「常嘆不遇、怨之言、屢見於歌詠」と。彼は生涯不遇を嘆き榮達を希望して苦悩した人であつた。その怨言の数々は和歌のみでなく彼の日記に縷々として綴られている。

王朝末期から中世へかけての時期は、日本史の上でも一大転換期であり、混乱の世であつた。実力ある新興の武家は、昨日の文人、公家達を駆逐して政治一切を握つた。今や平家亡びて源氏興り、遂に頼朝は鎌倉に開幕した。武家の圧制的支配に貴族は屈辱せねばならない。彼らは、精神的にも、又経済的にも悲嘆を味わなければならなかつた。

当時は既に王朝時代の庄園制度経済制度が崩壊し、中央集権制は事実亡んでいた。故に、官吏の官職位階に対しても受くべき俸給は附随して居らなかつた。しかしながら公家階級は長い伝統にあこがれを有ち、武家の実力を、よそに見てせめて官位の昇進に励む事であつた。官位尊重は単に裝飾的榮飾に過ぎなくとも、彼等に対して無上の満足と喜悅とを与えたのである。而もかゝる空位空官ながら低位者は高位者より下位にあらねばならなかつた。いきおい位階の濫与が行われ、官位の競望が激化された。此処に於いて無力な中小公家は、権門に仕え、追従する事によつて昇進

の運動に腐心しなければならなかつた。しかも、一大權威の家柄がなく多数の公卿によつて実権が分割されていた状態であつたから、仕えた主人が不遇の場合は、全く絶望に近かつた。定家もまた中流官吏の身分で九条家の兼実、良経父子に仕えた。兼実は平家失脚後京都での大立物であり又、文芸の愛護者でもあつて、始めは六条家の清輔を認めていた。が清輔の没後、御子左家の俊成の歌を愛し長く之を好遇したから、定家は最初から九条家を背景にして社会に立つ運命にあつた。兼実は当時後鳥羽院の院別当で内大臣である源通親と云う競走者を有し、兼実親幕派であれば、通親は尊皇主義をもつて之に対した。更に通親は卿二位兼子と云う女傑と結んで策謀する。(定家は晩年に至るまでこの卿二位によつて悩まされる事となつた。)その上兼実にとつて運の悪い事には、彼が院の後として入内せしめた女、宜秋門院には皇子の御誕生なく、通親の養女承明門院には、建久元年土御門天皇の御誕生があつたので、是より通親の権力は強大となつた。建久七年兼実が関白を罷めた時、弟慈鎮は天台座主を辞し、子良経も内大臣を辞して閑居した。時に定家は二十五歳、九条家の沈滞した事は、彼の社会的進出に極めて悪く影響した。

こす波の遺りを拾う浜の石のとをとて後も三年すゞしつ(閑居

百首)

廿六歳の時、定家は右の様な歌を詠み、拾遺(侍従)の位で三年も経てしまつたと嘆いている。これより二年後、左権少將に任ぜられた時には大喜びで「面目怍悦之至無物取喻候」(拾玉集)と記した。が、その後も又空しいまゝに十年の月日を経てから漸く安芸権介に任ぜられた。「予兼安芸権介、被載文書、尤以珍重、似在世身」(記正治元年正月廿日条)と感激している。かゝる遅々とした彼の昇級状態は九条家の失脚の悪影響とは言え、当時攝籙家の子弟でない者は当然舐めねばならぬ悲しみであつた。正治二年の秋、初度百首の成功によつて、歌人としての名は認められたが、官級に於いては依然としてそのまゝであつた。才氣負う若い定家が並の昇進に満足している筈がなかつた。建仁二年彼が四十一歳で左権中將に任ぜられる頃より、彼の昇進欲は激化し、深酷さを増して来るのである。

その頃彼は某大納言の許へ、「異様な瘦馬」を賄賂として送つた(記、正治元年八月十日条、彼は当時貧乏であつたのである)又は、昇進への執心から任官された夢を見たり(記、正治元年七月十二日条)した事もある。又除目の発表の際は「老翁数輩新任頭躍驚目」(記、正治元年十二月十日条)と記して他人を羨み、或いは、「地下身進退谷、衰令卅八、每望傍人榮貴、只預運命」(記、正治元年十二月廿九日条)と除目に洩れた吾身を慨嘆

したりしている。正治二年秋の除目の頃である。除目毎に苦い経験をして来た彼は、又々陰鬱になり、ヒステリックに「京官除目云々、耳殊冷然……心神殊悩、四旬衰病与愁計会、是暮當世路可憚指」（記、正治二年十月廿六日条）と書いている。除目に対して耳を塞ぎ、聞くまいとする彼の心中には、まさに深刻なものがあつた。四十才で既に老込み一途に吾身の不運を嘆く彼であつた。然るに、翌日の除目には、彼の初度百首の成功の故であらうか、予期に反して加階の沙汰があつた。正四位下に叙せられたのであるが、その日の日記を見ると「年来沈淪、出仕極厚顔是依身過也、不可怨人」とあり、更に「而今忽不出望、預一階、旧勞不空、極心忝以之爭不勵奉乎」と記す程の感謝感激振りである。彼の心に起る一喜一憂目に浮ぶ様に、記されており、感情の興奮冷却の激しい人、瞬間々々の気分到他事を省りみず熱中する性格である事が知られる。この様に自ら沈淪の身をかこち、時には官途昇進の劃策を試み、その為に焦燥し、絶望し、憤懣自嘲懊悩を繰り返し、或いは本意達して狂喜感激する等の記事は彼の生涯に互る日記を埋め尽くしている。彼がかくまで憧憬したものは何であらうか。それは参議となり、卿相に任ぜられて華麗な宮廷生活を楽しむ事であつた。（記、建仁元年十二月十一日条）

定家の榮達に対する欲望は、これだけではない。歳を重ねて行

くにつれて、めざましい利己的な貪欲さを示して来る。日記元久元年一月七日条には、彼の自尊心を傷つけてまで権門に追従し、心にもない賀詞等を述べに行つた事が記されている。又或時、父俊成が通親の愚劣極まりない歌合に出かけて行くのをみて定家自身「追従の為止む無き」と記し、「九旬竊老人定嘲歟、可哀」と自嘲を洩らしている（記、正治二年十二月廿七日条）又、主君から不快事を命ぜられても「只形勢に従うのみ」と咄いたりした。

（記、建暦元年十月十七日条）四十四、五才の頃から、彼はしきりに三位所望を申入れたがその望は権門の為になかなか達せられなかつた。彼の忍懣は、兼実良経の吹拳なき故だと、九条家に向つて「内府執權：除目之面猶尋常於今権門女房以申行、殿下御力不及歟」（記、建仁三年正月十三日条）とか「所望事更無御吹拳御心奉行更無詮」（記、元久元年三月三十日条）と言う記事になつて表われる。父俊成が正三位に叙せられたのは五十四才の頃である。定家の三位所望は確かに焦燥であり、虫のよいものである。所望事が叶わぬからと言つて、先代から世話になつた兼実良経を恨み「奉行甲斐なし」と記すのはあまり打算的ではなからうか。彼は、そこで次に、当時權力を恣にしていた卿二位に取入る事となる。卿二位は土御門天皇の御母承明門院の叔母君であつて、後鳥羽院の御心を完全に捕え得た女傑であり、太政大臣頼実を夫に有

ち頼実と通親が結んでいたから、その勢力は院政を左右した。誰でも彼女の意志を通さねば、昇進は実現不可能の状態であつた。

定家も、渾身傾けて、卿二位に運動したが、長らく望みは果されない。煩悶焦心した定家の卿二位に対する怨は募つた。「除目之面、不足言偏在狂女心歟、後代如何」(記、元久二年一月三十日条)。「聞書到来…権門狂女、等之夫、帶重職願官」(記、元久二年四月十一日条)等と批難し、果ては彼女の勢力を「牡鶏之晨」(記、建永元年五月廿日条)と、言うひどい言葉で罵倒するに至つた。鬱々として、目的を遂げられぬ彼の嘆きは、屢々辛辣な除目評となり(記、元久元年四月十三日条)又激しい自嘲となる。時折、定家は初老の身でありながら役目の為に、同位の撰録の子弟と交わらねばならなかつた。彼は自ら非常にみすばらしく感じたとみえて「沈淪棄置之老将三人、三人之恥辱在一身…愁歎摧身、供奉曝面、誠是又不運之專一、恥辱之無双歟」(記、承元二年七月十日条)と記した。又、除目は一層彼を苛立たしめた様で「毎対傍人之榮貴、独拭紅淚、只不剃頭之過怠也、不可恨人」(記、承元元年二月九日条)等と分別顔にうそぶいている、のも笑止のいたりである。彼はこの様な恥辱も嘆きも皆子供の出世の爲堪えねばならない(記、建仁元年十二月八日条)とも述懐した。種々と、能う限りの策謀を凝らした末、定家は三位侍從を申入れた。

(記、建曆元年九月六日条)翌日、成功の報を受取り、深夜に拘らず即刻卿二位の許へ馳せて謝し、日記に「如僕衰老賤翁、寧有此恩哉、尤宜怵悦」と記した。三位になつた彼は、又すぐに二位昇進の運動を始めるが、その後といえども卿二位は嚴然として、彼の行手を遮つた。建曆二年、加階所望して機を待つて居た彼は「卿二位に昇進せしめたい他の候補者があつたので彼は失敗した」申を聞き(記、建曆二年六月廿五日条)卿二位への恨みは募るばかりであつた。

彼五十五歳建保四年十二月に、「雪のうちの本の松だに色まされ、かたへの木々に花もさくなり」の歌を院に奉つて、正三位に叙せられた。建保四年と申せば、四、五年後にはかの承久の乱が興つてゐるから、当時は、院の御周囲に切迫した空氣が流れてゐたものと推察しうる。

倒幕の氣慨を内に潜めて、暗々裏に準備を進められていた院の御心を察すべくもなく定家は自己の昇進に齟齬していた。承久三年五月の乱は、公武衝突の表面化したもので、京勢の不利に終つた。世の中は一変し、三上皇の遷幸、後堀河天皇の踐祚、定家の義兄西園寺公経の任大臣、卿二位失脚等があつた。定家の周囲はめまぐるしく転回したであろうが、この乱の前後四年間と云ふもの、彼の日記が關けているので、乱に対する彼の態度は知る由も

ない。唯、院をお慕いする者達が、非常に悲しんで、秀能は院を追うて出家し、家隆は思慕の情を歌に託したのに対し、定家の書いたものには、この様な院をお慕いする言葉の片言隻句さえ見つからない事は確かである。院と定家とは、その性格や歌風からも一致せず、元来定家は圭角の人であつたから院との交わりも深厚ではなかつた。しかし、定家が歌人として名声を博し得たのは、一重に院の御計いの為であり、その後も数多の御恩に浴していたのであるから、彼のとつた態度には疑問を抱かざるをえない。しかし定家には定家なりの、事情があつて、世間を配慮して行動した形跡が認められる。定家は夙に承元の頃から、源実朝の選歌依頼を受けたら、彼の歌論書「近代秀歌」を実朝に送つたりしていた。その上、彼の義兄にあたる西園寺公経の孫、頼経が関東へ下り、後に將軍となつていたので定家と関東との関係は浅からぬものがあつた。この様な事情からして、承久の乱に対する彼の処方には随分複雑なものがあつたに相違なく彼の曖昧な態度は、実に当時の公武衰興の問題に連なるものであつた。この事は愈々和歌の世界に迄も影響を与えた。新勅撰集勅撰の沙汰が寛喜二年、後堀河天皇から定家に下つた。定家は「和歌の気味境を隔て、忘却之由」申して一度は辞退したが、叶わずして、撰進する事となつた。その時彼は「今撰進する事は前代の優れた御製も多い故、こ

れを満たせば一杯になるだろう。すれば関東への聞えも悪い。といつて、御製を入れなければ世人は自分の不明を誇るであろう」(記、寛喜二年七月六日条)と思いをめぐらしている。案の如く新勅撰集は「中納言ならぬ人のして候はゞ取りてみたくだにさぶらはざりしものにて候。さばかりめでたく候御所たち一人もいらせおはします」(越部禅尼消息)と批難された。

承久の乱後、西園寺家の権力大にして、卿二位が失脚したので定家の昇進は甚だ順調であつた。定家の息子為家の昇進は更に著しく、廿九歳で参議兼侍従、三十九歳で權中納言、四十四歳で既に大納言正二位に昇格した。定家は、非常に喜び「吹笙者あればこそ」(記、嘉祿二年四月十九日条)と感謝している。定家自身は、安貞元年十月六十一歳の時、正二位を申入れてすぐに許され日記にこの喜びを次の様に記した。「正二位者、人臣之極也、不逢乱世者、争叙之哉、可謂身上之得分尤希代之珍事也、心中甚自愛」(記、安貞元年十月廿一日条)俊成が、参議を志望しながら皇太后宮大夫に終つたのに比較して定家の昇進はめざましい。しかし、定家の榮達の野望は、正二位に叙せられた後も衰えを見せなかつた。「在世甚無益、急以此病終、命第一歟」(記、寛喜二年十月廿三日条)とか、除目の際には「摧心肝宿運可悲加階事重申入」(記、寛喜二年十二月三十日条)等記された日記を見ると

定家の昇進に対する、執心には鬼氣さえ感ずる。

次に、定家の昇進運動とも密接な関係のある、彼の経済生活を瞥見しよう。正治元年十二月三日条の日記に、内大臣通親が賄賂を好むと聞いて、定家は之を「近代之法、只非賂者、無他計」と批難し「公私重疊、已無其計、為之如何」を加えている。実際には、賄賂金を持ち合わせなかつた定家が、賄賂の是非とも必要な当時の昇進運動に手を掛けて眺めていなければならなかつた心中を思いやる事が出来る。彼は、細川吉富と言うかなりの庄園を有し、一応の収入は存したが公家としての一門を構え、保持して行くには、なお不充分であつた。のみならず不時の課税課役が官からと言わず主家からも課せられた。そこで「公私重疊」とか「為之如何」等と嘆いたのである。又、母の四十年遠忌は充分営みたが、それも思う様に任せぬからと言つて、「貧家之無力、所不幾悲哉」（記、天福元年二月十三日条）と記した。寛喜年間の大飢饉の時、庄園の物質では不足を告げる事を恐れ、彼は邸宅の北庭を麦畑に作りかえさせた事を述べた後に、「雖少分、為支凶年之飢也、莫嘲貧老、有他計哉」（記、寛喜二年十月十三日条）とも記している。風巻景次郎氏の研究（『新古今時代』所収「定家伝と時代相」）の中に、「当時の貴族階級は平安朝に比して生活全体が低下し、貧乏になつたのではない。むしろ大財閥であつた。日

本の経済力は華々しく近世社会を形作るべく前進して居つた。只従来と異つた大きな変化は公家階級が把握しておつた独占的政權を失つた事であつた」と大略以上の様に、述べておられる。貴族の実権や財産は次第に武家階級の手中に吸収されつゝあつた。此の様な貴族の生活に自由快活な進展は望めないのが当然である。貴族達は、只従来所有していた財産を失う事なく保持する事が、精一杯の努力であつた。定家の誇張気味の「貧老」「貧家」「乱代貧者」（記、正治元年四月廿日条）の語は、以上の如き生活事情を指しているとみれば充分頷けるのである。定家の財に対する執着は、さして強くない様である。

更に、彼の生活を脅すものに、日記の処々にみられる、天災や群盜がある。「越部庄去十九日洪水：不運之身遇乱代」（記、正治元年八月廿九日条）とか、或時忽然とつじ風が吹き起り、「拔木揚沙石、人家門戸并車等皆吹上：古老云、未聞如此事」（記、治承四年四月廿九日条）等の記事が見られる。寛喜年間の飢饉には「飢人且顛仆、死骸滿道、遂日増加」（記、寛喜三年七月二日条）の有様であつた。盜賊は掠奪を専らとした。盜賊の中には、生活の保証の破れた下層公家や家人も交つていた。（記、安貞元年正月九日条）定家は記して、「近年群盜蜂起」して牛や車を取去り、内裏が焼けて累代の礼服は穢されたと言う（記、安貞元年

四月廿二日条) 或時、家隆邸が襲撃され(記、寛喜元年六月廿七日条) 次には定家の邸の小屋へ、竊盜三人程入り衣裳を剥ぎ取つた。(記、安貞元年閏三月廿六日条) 而して、此等盜賊等を河原に於いて、連々と斬つても斬つても、後を断たず、官憲の力を以てしても如何ともならなかつた。(記、安貞元年閏三月三日条) かの方丈記の作者が、如実に写した儘の悲惨きわまりない世相であつた。

定家は、この様な變動極りない大転換期に、衰び行く貴族の一人として出来るだけ生き伸びようとして、凡々たるお行儀のよい俗物になり果て權力に追従し、後鳥羽院や九条家への思誼を忘れた。或いは、関東への聞えを憶り、又或いは自ら「狂女」と罵つた処の卿二位に追従した。秀能や家隆の如き厚情の人達とは、全く対照的な人柄であつた。多才多能の定家は、混乱し顛倒した様な時代にあつて、時にはどうかと思われる程の逞しさと、片意地の如き積極性を以つてよく時代を乗り切り、後世に揺るがぬ名声と、繁榮した子孫とを残したのである。

五

敏感な感受性、積極的な意欲、明晰な頭脳等を兼ね備え、和歌

連歌、歌論及び古書校勘、日記等多種多方面にわたる文学的業績を残した点でも、定家を博覧強記、精力絶倫の名で呼ぶにふさわしいかもしれない。しかしその反面には、以上見來つた如き神経質で直情径行、他人に対して傍若無人に振舞、傲岸不遜の人でもあつた。のみならず、極めて感情家であつて、感情の冷熱恆無く、他人を罵倒し毒舌を吐き、猜疑心や嫉妬心が深い。忘恩、冷血漢の一面があるかと思えば、己の不運孤独を盾に他人にのみ期待しようとする虫のよい愚痴不平家でもある。特にすさまじいのは、功利的に動き、榮達野望を遂げようとする醜い貪欲さであつて、その異常な記事は果しない煩悩の虜となつて遁れる道を知らない定家の姿を彷彿させる。定家の生涯は、この様な苦惱に満ちた、粘り強い、強靱な生命の物語である。この粘り強さこそ実はその精力絶倫的な研究や作歌等の成果を挙げしめたものであり、艱難を極めた当時の社会生活の中に又、病魔とのたゝかいの中に彼をして最後まで耐えしめたものである。がまた、この艱難それ自体が定家の片意地なまでの執拗さを生みだしたものであるとも言えるのである。醜魂の定家がどうして、あのように美しい和歌を詠出出来るのであろうか。不思議に思われる。

定家の和歌に対する精進の後を辿ればこの事は明になろう。前記した様に、青年時代の定家は不幸であつた。才氣活潑の若い定

家がその主家と共に長い沈淪の日数を重ねる事は耐難い事であった。

彼は苦悩し焦燥を感じたであろう。その時、彼を慰めたのは和歌の道であり、俊成を父とした定家は、斯道こそ自分の選び取るべき道だと考えたにちがいない。血みどろの精進の結果、彼は相次いで百首和歌を詠出、若年ながら進歩めざましく千載集及び内屏風歌にも先輩を抜いて数首選入された。定家には常に佳作を発表して人の注目を引こうとする意識が働き、而して歌の想を鍊り、技巧に腐心する日が続いた。廿七、八歳の頃から、彼独自の風骨ある歌風を生むに至り、人々はこの新奇な詠み振りに目を見張つて「新儀非抛達磨歌」（拾遺愚章員外）と言う誹謗的名称を之に与えた。しかし自信ある定家は世評に屈する事なく、新風の和歌を益々発展成長させて、遂にあの華麗な幻想歌を生む事に成功した。後鳥羽院は彼の歌を愛し、認容せられ、新古今集に於ける主要な要素とされた。定家の和歌が世に認められるまでの経過を辿つてみても彼の非常な努力は常に意識的計画的である。その為、彼の和歌は歌道に熱心なものではなく「栄達の方便」とさえ見られる様な意見を持つ人も少くない。たといその精進の動機に名声を求める不純な氣持が含まれていたにしても和歌に組む定家の風貌は、既に和歌と一体になつてゐる芸術家の姿であ

る。この達磨歌の記録は、定家の人柄を知る上で特別注目せねばならないものであろう。社会不安や個人としての不運や病苦等、現実においては到底希望を抱く事の許されなかつた定家は、心中充たされぬものを感じて深く和歌の世界に沈潜する様になつたのは当然の様に思われる。定家のこの様な欲求は、詩の世界に始めて美を発見、芸術に対する喜びを味い得、自己の才能を発揮し得る領域を此処に得てその空想を高く／＼飛翔させたかのようなうつつた。定家の和歌における聯想想像の自由さを思い出してゐたゞきたい。定家の描く夢は、現実の陰鬱な苦悩焦燥の生活にくらべてどんなに美しく明るいことか。定家は、現実世界に求められぬものを、均整調和のとれた美しい情緒を切実に憧憬した。不純な現実生活に対する抵抗能力として純粹な情緒を求めたのではなからうか、憧憬れる状態はそのまゝに美しく感動的なものである。彼の歌から感じ取られる渺々とした音楽的印象も、その多種多様な表現技巧もこの憧憬心のあらわれた外ならない。その表現技巧における素材駆使の緻密な手さばきそれは素材にすら束縛されずに、我が意のまゝに手を運ぶのである。美的情緒を憧憬する彼の態度にはその情緒に身をまかせて陶醉すると云うよりも想像の世界に楽しみ素材や構想と戯れていると言つた感じの方が強い。

芸術家というものは、古び絶えようとする旧家の中から最後に

咲き出た一輪の花のようなものだ。乃至は残燭の炎のように、最後の光芒を放つところにあらわれるものだという様な事を川端康成氏は述べておられる。平安時代から鎌倉時代へ、大きく転換する歴史の流れの中に捲き込まれ崩れ去つて行く貴族の運命が、定家の煩惱を掻き立てて奇異な性格を生んだが、それと同時に、その土壌から絶品と称される類の和歌が生じた事は、最後に咲き出た一輪の美事な花とも言ふべきものではなからうか。十九世紀初頭かの独逸浪漫派の人々は、社会的貧困と不安の中にあつて精神の自由を叫び現像の力を尊重して無限なるものを憧憬し美しい情感的文芸の花を咲かせた。これと一脈相つながるものが、我新古今集歌人の感情にも見られるのではないであらうか。